



# 日本植物分類学会 ニュースレター

No. 77

May 2020

## 今号のトピックス

会長および評議員選挙があります。投票の締め切りは 7/13 です。  
→ 2 ページ

2020 年度日本植物分類学会総会は本誌上において延期開催いたします。  
→ 5 ページ

## 目次

会長および評議員選挙公示	2
評議員会からの会長候補者の推薦	3
諸報告	
2020 年度第 1 回評議員会議事抄録	3
2020 年度日本植物分類学会総会の延期開催について	5
「屋久島の低地照葉樹林の保全を求める要望書」提出	6
2019 年に到着した交換図書一覧	7
お知らせ	
2020 年度日本植物分類学会野外研修会のお知らせ	8
メールニュース登録について	8
東京大学植物標本室（総合研究博物館）の一時閉室のご連絡（続報）	9
寄稿	
シノニムリストをつくろう (3) 国内文献とつきあわせる	10
学名のラテン語 (21) 種と種内分類群の学名の形容語 — 同格の形容語	14
2021-2022 年度日本植物分類学会役員選挙被選挙人名簿	16
会員消息	20

## 会長および評議員選挙公示

選挙管理委員長 志賀 隆

2020年12月末をもって、2019-2020年度の役員が任期満了となります。これにともない、次期会長および評議員の選挙を、学会会則第12条および役員等の選出についての細則に従い、下記の通り行います。

この選挙で選出される会長および評議員には、学会運営や活動の舵取りをしていただくこととなります。大切な選挙ですので、学会員の権利である一票をぜひ投じて頂きますよう、会員のみなさまにお願いいたします。投票の締め切りは2020年7月13日（月）です。

なお、会則第13条3で定められているように、役員には在任期間に関する制限があります。今回の選挙では、以下の方に各役員の被選挙権がありません。投票用紙に記名されても無効になりますのでご注意ください。

会長の被選挙権なし：伊藤 元己

評議員の被選挙権なし（五十音順）：志賀 隆，副島 顕子，土金 勇樹，西田 佐知子，藤井 伸二，村上 哲明

また、今回役員等の選出についての細則第2条にもとづき、評議員会から会長候補者として以下の4名の方が推薦されています。なお、評議員会推薦の会長候補者以外の被選挙権をもつ会員に投票されてもかまいません。

評議員会推薦の会長候補者（五十音順）：永益 英敏，西田 治文，村上 哲明，綿野 泰行

### 選挙実施細目

1. 投票締切：2020年7月13日（月）（当日消印のものまで有効）
2. 投票用紙：投票には、ニュースレター本号に同封されている会長選挙投票用紙（若草色）と評議員選挙投票用紙（菫色）を使用してください。それ以外の用紙を用いた場合、無効となります。
3. 記入方法：ニュースレター本号の被選挙人名簿をご覧になり、会長選挙投票用紙（若草色）に会長候補者1名を、評議員選挙投票用紙（菫色）に評議員候補者8名以内をそれぞれ記入してください。同姓あるいはよく似た名前の会員がおられます。投票に当たっては被選挙人名簿を参照の上、氏名を略さずに記入してください。規定数を超過して候補者名を書かれた場合は、その票自体が無効となります。また、会員以外の候補者名を書かれた場合は、会員以外の部分のみが無効となります。
4. 投票用紙の郵送：記入後、投票用紙を二つに折り、同封の返送用封筒に入れて郵送してください。封筒には、ご自分の住所と氏名を必ず記入してください。封筒が同封されていないか、あるいは紛失した場合には、「会長・評議員選挙投票用紙在中」と朱書きした任意の封筒で、下記の投票用紙送付先まで郵送してください。その場合、切手代はご負担ください。なお、投票用紙の再発行はいたしません。
5. 開票：2020年7月20日（月）に票を開票します。開票場所は新潟大学を予定しています。会員2名以上の立ち会いのもとに開票します。立ち会いを希望される方は、開票日時・場所の詳細を追って連絡いたしますので、選挙管理委員長までご連絡ください。

6. その他、不明な点などございましたら下記宛で連絡ください。

投票用紙送付先および連絡先

〒 950-2181 新潟県新潟市西区五十嵐 2 の町 8050 番地 新潟大学教育学部

日本植物分類学会選挙管理委員長 志賀 隆

Tel. & Fax : 025-262-7154; e-mail: shiga@ed.niigata-u.ac.jp

\* 同封の返送用封筒と郵便番号が異なっていますが、返送用封筒を使用しない場合はこちらの郵便番号を記入してください。

## 評議員会からの会長候補者の推薦

評議員 藤井 伸二

本学会では、役員等の選出についての細則第 2 条に「評議員会は若干名の会長候補を推薦することができる」と定めてあります。そこで、評議員会より下記の通り会長候補者を 4 名推薦します。なお、評議員会からの推薦は、学会員の皆さんの推薦候補者以外への投票を妨げるものではありません。どうぞ熟考の上、評議員会からの推薦候補である・ないにかかわらず、最も適任と思われる方に大切な一票を投じてくださるようお願いいたします。

推薦する会長候補者（五十音順・敬称略）：永益 英敏，西田 治文，村上 哲明，綿野 泰行

## 諸報告

---

### 2020 年度第 1 回評議員会議事抄録

庶務幹事 海老原 淳

会場：ウェブ会議システムを用いた開催

日時：2020 年 2 月 29 日（土）16 時～21 時

参加者

評議員：総数 12 名、( ) 内は被委任者

出席 [9 名]: 志賀 隆, 土金 勇樹, 内貴 章世, 永益 英敏, 西田 佐知子, 藤井 伸二, 村上 哲明, 山田 敏弘, 綿野 泰行

委任状出席 [2 名]: 秋山 弘之 (西田 佐知子), 副島 顕子 (藤井 伸二)

欠席 [1 名]: 池田 博

幹事会・委員会委員長: ( ) 内は役職

出席 [15 名]: 海老原 淳 (庶務), 厚井 聡 (会計), 阪口 翔太 (ホームページ), 藤井 俊夫 (図書), 山本 薫 (ニュースレター), 田村 実 (編集委員長・英文誌編集), 山田 敏弘 (和文誌編集), 黒沢 高秀 (日本分類学会連合, 研究・普及推進委員会委員長), 布施 静香 (講演会), 西野 貴子 (野外研修会), 藤井 伸二 (絶滅危惧植物専門第一委員会委員長), 大西 亘 (植物データベース専門委員会委員長), 村上 哲明 (ABS 問題対応委員会委員長), 田中 伸幸 (標本問題対応委員会委員長), 瀬戸口 浩彰

(学会賞選考委員長)

欠席 [4名]: 伊藤 元己 (会長), 樋口 正信 (絶滅危惧植物専門第二委員会委員長), 朝川 毅守 (自然史学会連合), 池田 博 (国際シンポジウム準備委員会委員長)

1. 評議員会開催にあたり, 藤井伸二会長代行から挨拶があった。
2. 庶務幹事により定足数が確認された。評議員 9 名出席, 委任状出席 2 名により評議員会は成立した。
3. 評議員会議長として藤井伸二氏, 議事録署名人として議長に加え, 山田敏弘氏, 綿野泰行氏が選出された。
4. 報告事項
  - 4.1. 自然史学会連合関連報告 2019 年度活動報告および 2020 年度活動計画の説明がなされた。
  - 4.2. 日本分類学会連合報告 2019 年度活動報告および 2020 年度活動計画の説明がなされた。
  - 4.3. 各種委員会に関する報告
    - (1) 編集委員会 英文誌『APG』および和文誌『植物地理・分類研究』の昨年度編集状況および 2020 年度出版計画について説明がなされた。
    - (2) 学会賞選考委員会 日本植物分類学会賞の選考経過の説明がなされた。
    - (3) 論文賞選考委員会 日本植物分類学会論文賞の選考経過の説明がなされた。
    - (4) 植物データベース専門委員会 活動報告。
    - (5) 絶滅危惧植物専門第一委員会 環境省第 5 次レッドリスト改定にむけた作業の現状説明と活動報告。
    - (6) 絶滅危惧植物専門第二委員会 同上。
    - (7) ABS 問題対応委員会 活動報告。
    - (8) 国際シンポジウム準備委員会 2020 年度は 8 月初めに韓国で開催予定。
    - (9) 国際命名規約邦訳委員会 『深圳規約 (日本語版)』を 2019 年 8 月 30 日に北隆館より発行した。
    - (10) 標本問題対応委員会 10 月より特定科学研究施設登録制度が発足。植物防疫法の運用再度見直しによって, 植物の乾燥研究試料は検査証明書の添付を要しない物品として扱う措置に変更される見込みである。
    - (11) 研究・普及推進委員会 新規に発足。活動計画の説明。
  - 4.4. 図書関連報告 寄贈雑誌・交換状況, バックナンバーの販売状況の説明がなされた。
  - 4.5. ニュースレターに関する報告 2019 年度実施報告および 2020 年度準備状況の説明。
  - 4.6. ホームページ・メーリングリスト関連報告 学会公式 HP および ML の運用状況の説明。
  - 4.7. 会務報告 2019 年度の事業報告。
  - 4.8. 会計報告 2019 年度の会員状況, 会費滞納者の状況の説明。
  - 4.9. その他
    - (1) 講演会報告 2019 年度の講演会の実施について報告。
    - (2) 野外研修会について 2019 年実施報告および, 2020 年度準備状況について説明。
    - (3) 次期会長・評議員の選出について 選挙管理委員会委員長に志賀隆氏 (新潟大学), 選挙管理委員に五百川裕氏 (上越教育大学)・加藤将氏 (新潟大学) を指名し, 了承された。選挙については, 6 月頃に実施予定と報告された。
5. 審議事項
  - 5.1. 2019 年度事業報告 (案) について  
海老原庶務幹事より 2019 年度事業報告 (案) が提案され, 承認された。
  - 5.2. 2019 年度決算報告 (案) について

厚井会計幹事より 2019 年度決算報告（案）が提案され、承認された。

### 5.3. 2020 年度事業計画（案）について

海老原庶務幹事より 2020 年度事業計画（案）が提案され、承認された。

### 5.4. 2020 年度予算（案）について

厚井会計幹事から 2020 年度予算（案）が提案され、質疑の後、承認された。

### 5.5. 次期会長、評議員の選挙について

『役員等の選出についての細則』第 2 条、「評議員会は若干名の会長候補を推薦することができる。」ことに則り、会長候補の評議員会推薦を行った。

### 5.6. 名誉会員の推薦について

藤井会長代行より、名誉会員の会員在籍期間を確認できる資料がないため、本年度は新規の推薦を見送ることが報告された。

### 5.7. 除名について

藤井会長代行より 4 年以上の会費未納の 11 名の除名候補の提案がなされた。審議の結果、対象者の中には除名ではなく退会扱いが適している会員もいることが指摘され、本人が除名を希望した 3 名の除名が承認された。

### 5.8. 第 19 回大会現地開催中止に伴う対応について

海老原庶務幹事より現地開催中止に対する公式対応が提案され、承認された。

## 6. その他

### 6.1. 第 20 回大会開催地について

藤井会長代行より、第 20 回大会の調整状況について報告された。

### 6.3. 会費滞納者の氏名公表について

海老原庶務幹事より、ニュースレター 75 号に会費滞納者氏名を掲載した経緯が説明された。

### 6.4. 学会賞受賞者の大会参加費について

海老原庶務幹事より、学会賞受賞者の大会参加費の扱いについて、現状が説明された。

### 6.5. 屋久島の環境保全に関する要望書について

藤井会長代行より屋久島の環境保全に関する要望書の内容と提出予定について説明された。

## 2020 年度日本植物分類学会総会の延期開催について

庶務幹事 海老原 淳

岐阜大会会期中の 3 月 2 日に開催が予定されていた 2020 年度総会は、大会の現地開催中止に伴いやむなく延期となりました。代替案として評議員会で検討しておりました 9 月の日本植物学会大会期間中の開催も、同大会のオンライン開催への変更によって実現困難となりました。この状況を踏まえ、例外的ではありますが、以下の要領で総会をニュースレター誌上にて延期開催させていただきます。

1. 総会を本ニュースレター（77 号）誌上で延期開催する。総会議案掲載のニュースレター 76 号が郵送された通常会員および名誉会員の全員を総会の出席者とみなす。
2. 議案に賛成または承認の場合は、投票や連絡を必要としない（返事のないことをもって、賛成または承認とみなす）。
3. 議案への意見（質問や動議を含む）がある場合は、指定期日までに電子メール・郵送で議長宛に意見表明を行う。
4. 意見について、容易に回答可能または議案の軽微な修正で対応できると議長が判断する場合

には、評議員会の承認または確認を経た上で、ニュースレター 78 号誌上に必要な回答・修正を掲載する。当該議案はこの掲載記事をもって承認されたとみなす。

5. 慎重な議論を要すると議長が判断するご見などが提出された場合には、当該議案についての総会開催を改めて検討し、ニュースレター 78 号で告知する。

【第 1 号議案】2019 年度事業報告案および決算案

ニュースレター 76 号, 13-18 ページに掲載

【第 2 号議案】2020 年度事業計画案および予算案

ニュースレター 76 号, 15, 16, 18, 19 ページに掲載

議長：岡崎 純子（大阪教育大学）

意見送付先（学会事務局気付）

メールアドレス jimmu@e-jsps.com

郵送先住所

〒 305-0005 茨城県つくば市天久保 4-1-1 国立科学博物館植物研究部

日本植物分類学会 庶務幹事 海老原 淳

上記議案に対してご意見・ご質問・動議のある場合は、6 月 30 日（火）必着で文書により議長宛に意見表明をしてください。電子メールでお送りいただいてもかまいません。

## 「屋久島の低地照葉樹林の保全を求める要望書」提出

庶務幹事 海老原 淳

日本植物分類学会は、「屋久島の低地照葉樹林の保全を求める要望書」を環境省、林野庁、鹿児島県、屋久島町宛に 4 月 10 日付で郵送提出しました。各要望の内容について以下に掲載します。なお、要望書の全文については、学会ホームページに掲載しておりますので、そちらをご参照ください。

-----  
環境省宛 要望書（提出先：環境省自然環境局長、環境省九州地方環境事務所長）

日本植物分類学会は、世界遺産屋久島の価値を損なうことなく次世代に継承するためには低地照葉樹林の重要性についての理解とその保全が重要と考え、以下のように要望いたします。

1. 国立公園の指定地域を屋久島の低地照葉樹林に積極的に拡大すること。

貴重植物が集中する榊川流域、一湊川流域、花揚川・鳴子川流域などの溪流沿いの照葉樹林を含む地域を早急に国立公園地域に編入する必要があると考えます。

2. 屋久島に生育する絶滅の危険性の高い植物種について、「種の保存法」による種指定を進めることに加えて「生息地等保護区」の指定を行うこと。
3. 屋久島の低地照葉樹林について、すでに国立公園に指定されている山地照葉樹林および冷温帯林との一体的な保全を図ること。また、保全を進めるにあたっては、林野庁および地方公共団体をはじめとした関係機関及び関係諸団体と協力・連携すること。

林野庁宛 要望書（提出先：林野庁長官、林野庁九州森林管理局長）

日本植物分類学会は、世界遺産屋久島の価値を損なうことなく次世代に継承するためには低地照葉樹林の重要性についての理解とその保全が重要と考え、以下のように要望いたします。

1. 屋久島の低地照葉樹林について積極的な保全措置を至急に講じること。  
貴重植物が集中する楠川流域、一湊川流域、花揚川・鳴子川流域などの溪流沿いの低地照葉樹林については、「保護林」等への指定をふくめた積極的な保全事業を進め、生物多様性の保全と持続可能な森林施業の両立を図ること。
2. 屋久島の低地照葉樹林において大規模伐採や砂防ダム建設およびそれらに付随した林道・作業道などの計画が持ち上がった際には、利害関係者及び専門家らが十分に議論する場と期間を設け、生物多様性の保全と持続可能な森林施業の観点に基づいた判断と合意形成を行うこと。
3. 貴重植物が集中する楠川流域、一湊川流域、花揚川・鳴子川流域などの溪流沿いの低地照葉樹林について、「生息地等保護区」への指定や「国立公園地域」への編入について関係諸機関と協力すること。

これらの低地照葉樹林について、すでに自然遺産や国立公園に指定されている山地照葉樹林および冷温帯林との一体的な保全を図ること。また、屋久島の低地照葉樹林の生物多様性保全と持続可能な森林施業を進めるに際して、環境省および地方公共団体をはじめとした関係機関及び関係諸団体と協力・連携すること。

#### 鹿児島県知事・屋久島町長宛 要望書

日本植物分類学会は、世界遺産屋久島の価値を損なうことなく次世代に継承するためには低地照葉樹林の重要性についての理解とその保全が重要と考え、以下のように要望いたします。

- 1) 屋久島の低地照葉樹林について積極的な保全を進めること。とくに、屋久島独自の仕組みである共用林については、貴県・貴町の主体的な保全の取り組みを進めること。
- 2) 貴重植物が集中する楠川流域、一湊川流域、花揚川・鳴子川流域などの溪流沿いの照葉樹林の保全にあたっては、環境省、林野庁、関係機関及び関係諸団体と協力・連携すること。

## 2019年に到着した交換図書一覧

図書幹事 藤井 俊夫

Acta Biologica Slovenica 61(2)  
 Acta ZooBot Austria 155(1-2)  
 Aliso 36(1-2)  
 Allertonia 17  
 Annals of the Missouri Botanical Garden 103(4), 104(1-4)  
 Austrobaileya (Queensland Herbarium) 10(2)  
 Bulletin mensuel de la Société d'Histoire Naturelle de Toulouse 154  
 Bulletin mensuel de la Société Linnéenne de Lyon 88(1-10), 89(1-2)  
 Bulletin of National Museum of Nature and Science, series B (Botany) 45(1-4)  
 Candollea 73(2), 74(1-2)  
 Fritschiana 90-94  
 Gardenwise 52-54  
 Hoppea 79  
 Journal of Plant Biology 61(6), 62(1-5)  
 Journal of Plant Research 132(1-6)  
 Journal of the National Taiwan Museum 71(3-4)

Journal of Tropical and Subtropical Botany 26(6), 27(1-6)  
Kew Bulletin 73(4), 74(1-3)  
Korean Journal of Plant Taxonomy 48(4), 49(1-4)  
Newsletter of Himalayan Botany 51  
Novon 26(4), 27(1-4)  
Plant Diversity 40(6), 41(1-6)  
Plant Ecology & Diversity 11(4-6), 12(1-6)  
Reinwardtia 18(1)  
Revue Valdôtaine d'histoire Naturelle 72  
Smithsonian Contributions to Botany 109, 110  
Systematics and Biodiversity 16(5-8), 17(1-4)  
Thai Forest Bulletin 46(2), 47(1-2)  
Thaiszia 28(2), 29(1, 2)  
The Bulletin of the National Tropical Botanical Garden 35(1-3)  
The Gardens' Bulletin Singapore 70(2), 71(1-2)  
Webbia 74(1-2)  
Willdenowia 48(3), 49(1-3)  
生命世界 (life world) 2019(1-12)  
植物研究雑誌 94(1-6)  
神奈川県植物誌調査会ニュース 86, 87  
大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 49  
大阪市立自然史博物館研究報告 72  
自然史研究 4(2)  
蘚苔類研究 12(1-2)  
徳島県立博物館研究報告 29

## お知らせ

---

### 2020 年度日本植物分類学会野外研修会のお知らせ

野外研修会担当 西野 貴子

2020 年度の野外研修会は、鹿児島大学の田金秀一郎氏にお引き受けいただき、秋に甕島列島での開催に向けて準備を進めてまいりました。しかし、新型コロナウイルスの厄災により安全が危ぶまれ、催行を検討しているところです。催行の可否も含めて、詳細は次号のニュースレターにて告知予定です。予定が決まらずご迷惑をおかけいたしますが、今しばらくお待ちいただきますようお願いいたします。

### メールニュース登録について

ウェブサイト・メールニュース担当 阪口 翔太

植物分類学会の公式メーリングリストは、学会大会、講演会、出版物、研究助成・公募等に関



するメールを会員に配信し、情報共有を図ることを目的に設立されました。しかし現状では会員のメーリングリストへの加入率が低く（約40%、2020年4月1日現在）、学会からの情報が十分に伝わらない状況です。例えば、今年の岐阜大会においては、現地開催中止という重要な連絡を行いました。メーリングリストに未加入の約6割の会員にはそれが叶いませんでした。

そのため、本メーリングリストの加入率を上げて学会情報が会員の皆様に速やかに伝わるように、名称の変更と登録方法の改善を行います。

従来は「メーリングリスト」と呼んでいた情報配信ツールの名称を、「メールニュース」に改めさせていただきます。現在の日本植物分類学会のメール配信の仕組みとしては、会務が必要と判断したニュース情報だけが流されており、一般の登録者は投稿できません。そのため、メーリングリスト上で無秩序な情報のやりとりは起こりませんし、学会と関係のない内容のメールも配信されません。しかし、こうした実態は未登録者の方々には伝わらず、またメーリングリストという名称から、「不要なメールが多く送られてくるのではないか」という不安をお持ちの会員もおられたのではないかと思います。そこで、実態に即した「メールニュース」という名称に変更することで、学会のニュース情報が得られるツールであることをご理解頂きやすくなると考えております。

登録方法の変更についてですが、現在の未登録会員につきましては原則としてメールニュースに加入させていただきます。これまで、メールニュースへの加入方法としては、学会入会時にアドレス登録を希望することで手続きが行われましたが、その機会を逃してしまった会員や、メールニュースの存在自体を知らない会員もいるのではないかと思います。そうした方を漏れなく登録させて頂くために、担当幹事の方で学会が会員情報として把握しているメールアドレスをすべて登録させていただきます。ただし未加入の方の登録は必須ではなく、事前にメールニュース幹事（連絡先：hp@e-jsps.com）に非加入を希望する旨のご連絡を頂ければ、登録いたしません。この場合のご連絡は、2020年6月30日までに上記アドレスへお願い致します。6月30日以降に、登録を希望されない方以外のアドレスをメールニュースに登録させて頂き、7月10日にメールニュースにてアドレス登録に関するご連絡を差し上げるように致します。この7月10日の配信を受け取れない方は、アドレスがメールニュースに登録されていない可能性がありますので、登録を希望される方は後日にメールニュース幹事まで登録状況をお問い合わせ頂きますよう、宜しくお願いします。

また、これまで学会にメールアドレスを通知されていच्छゃらない方は、メールニュース幹事までメールもしくはFAX（FAX連絡先：075-753-6694）でアドレスをお知らせ頂くか、次年度の会費振込用紙にアドレスを記入して頂ければ、メールニュースに登録させていただきます。また、現在は使用していないアドレスをメールニュースに登録されている方については、有効なアドレスをメールニュース幹事にお知らせください（なお、連絡先として学会にご通知頂いているメールアドレスを変更される場合は、メールニュースへの登録・非登録に関わらず、会計幹事（kaikai@e-jsps.com）までご連絡ください）。学会にご自身のメールアドレスが登録されているかどうか分からない方は、メールニュース幹事までお問い合わせ頂きますようお願いいたします。

## 東京大学植物標本室（総合研究博物館）の一時閉室のご連絡（続報）

東京大学総合研究博物館 池田博・清水晶子

昨年5月発行のニュースレター73号において、東京大学植物標本室(TI)・総合研究博物館分室(単子葉類・双子葉離弁花類)の一時閉室のお知らせをしました。その後、昨年秋より博物館の耐震

工事が始まり、現在は最終的な工程に入っています。工事が終了しましたら、移動・保管していた標本を元に戻し、標本室を再開する予定でした。

ところが、新型コロナウイルス感染症への対応のため、東京大学は活動を大幅に制限しており、そのため現在は総合研究博物館だけでなく、小石川植物園も標本室の活動を休止し、TI 全体が閉室しております。特に博物館では工事終了後に計画していた標本の運搬・配架作業もできず、再開のめどが立っていません。現在の状況が収束し、標本室の再開がいつになるのかははっきりした見通しは立ちませんが、博物館では今年の秋以降になることも予想されます。昨年のニュースレターでは、閉室期間を昨年秋から半年程度とお知らせしておりましたが、このような事情により、再開時期が大幅に遅れる可能性があることをお知らせいたします。TI の植物標本の閲覧を希望されている方にはご不便をおかけしますが、どうぞご理解くださるようお願いいたします。

再開のめどが立ちましたら、TI ホームページ <http://umdb.um.u-tokyo.ac.jp/DShokubu/> でお知らせします。なお、小石川植物園の標本室については、東京大学の活動レベル制限が緩和され次第、再開する予定です。

連絡先 (TI 共通アドレス) : [ti\\_herbarium@ns.bg.s.u-tokyo.ac.jp](mailto:ti_herbarium@ns.bg.s.u-tokyo.ac.jp)

## 寄稿

### シノニムリストをつくろう (3) 国内文献とつきあわせる

(付: 「auct. non」 「sensu ... non」 「pro parte (p.p.)」 「, “ ”」 [あるいは 「, as 」 ])

福島大学共生システム理工学類 黒沢 高秀

はじめに

前回までに、YList (<http://ylist.info/index.html>, 2018 年 11 月 3 日確認) や『Flora of Japan』(Iwatsuki et al. 1993, 1995a, 1995b, 1999, 2001, 2006, 2016; <http://foj.c.u-tokyo.ac.jp/gbif/>, 2020 年 1 月 25 日現在調整中のため非公開状態) などで原型を作り、日本産植物の必須文献・定番文献を付け加えました。ルーチンでできるのはここまでです。

次に行うのは、国内・国外の分類学的な文献とつきあわせて、文献を追加したり、シノニムリストに分類学的な見解 (以下で説明するような「auct. non」 「sensu ... non」 「pro parte (p.p.)」 など) を盛り込むことです。まずは、国内文献と付き合わせましょう。ここからは、その植物に関する分類学的な研究に関する知識が必要です。とは言っても、YList や『Flora of Japan』、必須文献の中でも特に『Enumaeratio Spermatophytarum Japonicarum』(Hara 1948–1954) などでは、付け加えるべき文献が掲載されていて、作成中のシノニムリストにおおよそ入っていると思います。今回は、その中で手に入れやすい国内文献を付け加えるところまで行いましょう。その前に、先に述べた、シノニムリストに分類学的な見解を盛り込むことについての説明をします。

「auct. non」 や 「sensu ... non」 を積極的につかおう

いろいろな人がナガハシスミレに *Viola rostrata* Pursh が当てていたが、これは間違いであるとき。

*Viola rostrata* auct. non Pursh, Fl. Amer. Sept. 1: 174 (1814); Makino in Bot. Mag. (Tokyo) 16: 137 (1902); ....

Wheeler (1939) がオオニシキソウの正しい学名は *Euphorbia maculata* L. だと主張したが、現在では間違いとされているとき。

*Euphorbia maculata* sensu Wheeler in Contr. Gray Herb. 127: 74 (1939), non L., Sp. Pl.: 454 (1753); Ohwi, Fl. Jap.: 722 (1953); ....

語義的には sensu (～の意味での), auct. non (そうでない著者による) ですから, それぞれの語句の前にある学名について前者では分類群が意識されており, 後者では学名が意識されているニュアンスです。

「pro parte (p.p.)」を積極的につかおう

Makino & Nemoto (1925) がイリオモテニシキソウはコニシキソウと同じ植物で *Euphorbia maculata* L. であるとしたが, イリオモテニシキソウは別種で正しい学名は *E. thymifolia* L. であるとき。

コニシキソウのシノニムリストでは

*Euphorbia maculata* L., Sp. Pl.: 454 (1753); ...; Makino & Nemoto, Fl. Jap.: 643 (1925), p.p.; ....

イリオモテニシキソウのシノニムリストでは

*Euphorbia thymifolia* L., Sp. Pl.: 454 (1753); ....;

*Euphorbia maculata* sensu Makino & Nemoto, Fl. Jap.: 643 (1925), p.p., non L., Sp. Pl.: 454 (1753).

どのようなときに, その著者が「同じ植物と見なしている」と判断できるかが重要です。以下に列挙します。

1. シノニムリストに含んでいる (これは確実)。
2. 和名の別名として挙げている (和名には実体 (植物) に対してつけられる場合と, 学名に対してつけられる場合があるので, 注意が必要)。
3. 分布から判断できる (注意が必要)。
4. 記載から判断できる (注意が必要)。

「疑わしきは, 指摘せず」を原則として下さい。「auct. non」, 「sensu ... non」は間違いの指摘であるので, 慎重にしましょう。

「, “ ”」(あるいは「, as 」)を積極的につかおう

本当は *Viola rostrata* Pursh であるところを, Makino in Bot. Mag. (Tokyo) 16: 137 (1902) は *Viola rostrata* Mühl. と記していた。

*Viola rostrata* auct. non Pursh, Fl. Amer. Sept. (Pursh) 1: 174 (1814); Makino in Bot. Mag. (Tokyo) 16: 137 (1902), “*Viola rostrata* Mühl.”; ....

「, “ ”」(あるいは「, as 」)は, 上記の様な著者名の間違いだけでなく, 学名のスペルミスなどにも使います。

「auct. non」, 「sensu ... non」, 「pro. parte (p.p.)」, 「, “ ”」は正しく使われているとシノニムリストの価値を上げます (研究も進展させます) が, 間違えていると元も子もありません。注意しつつ, 確実なところは積極的に使いましょう。

シノニムリストの作り方

### 3 「国内文献とつきあわせる。」

- 3-1. これまでに作ったシノニムリストで挙げられた文献のうち, 日本で出版された書籍や雑誌について, 現物に当たって確認する (既に定番文献として現物に当たっているものを除く)。

- 3-2. その際, 巻号, 出版年, 著者などが正しいか良くチェックをすること。結構間違ってい

- ることがある。雑誌名の略号は BPH (BPH Online, <http://www.huntbotanical.org/databases/show.php?1>, 2020 年 1 月 25 日確認) に従うこと。
- 3-3. その際、「auct. non」や「sensu ... non」, 「pro. parte (p.p.)」, 「, “ ”」を積極的に使うこと。不明な際は、知っていそうな人に遠慮なく聞くこと。
  - 3-4. 抜けているシノニムが引用されているときは、加えておく。
  - 3-5. 「新称」「nov.」など、新和名を示す言葉が含まれているときは、和名も書き加えていく。
  - 3-6. 取り扱いが疑問なところ、不明なところ、後で要検討なところなどは、前回のようにな網掛けなどにしておく。
  - 3-7. 手に入らなかった文献は網掛けにしておく。
  - 3-8. よく見直す。カンマ, コンマ, セミコロンなど, およびイタリックなどの字体指定なども。

### 主な国内雑誌

- Acta Phytotax. Geobot.: Acta Phytotaxonomica et Geobotanica 植物分類, 地理 Vol. 1 (1932)–現在も継続。Vol. 1–51 (2001) は J-STAGE (<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/bunruichiri/-char/en>, 2020 年 1 月 25 日確認) で, Vol. 52 (2001) 以降は J-STAGE の別のページ (<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/apg/-char/en>, 2020 年 1 月 25 日確認) で公開。
- Bot. Mag. (Tokyo): Botanical Magazine, Tokyo 植物学雑誌 Vol. 1 (1887)–現在も継続。Vol. 106 (1993) から Journal of Plant Research (J. Pl. Res.) に改題。Vol. 1–84 (1971) は J-STAGE (<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jplantres1887/-char/ja/>, 2020 年 1 月 25 日確認) で公開。古い巻号は英文論文と和文論文で別個のページを振っていたので注意が必要。この場合、和文論文のページは () に入れる。(例: Bot. Mag. (Tokyo) 36: (90) (1922))。この点混同されていたためか、以前 J-STAGE で抜けている論文があった。現在抜けていた論文が全部公開されたかどうかは未確認。
- Bull. Natl. Sci. Mus. Tokyo: Bulletin of the National Science Museum, Tokyo 国立科学博物館研究報告 No. 25 (1949)–95 (1974)。No. 1 (1939)–24 (1949) は Bulletin of the Tokyo Science Museum (Bull. Tokyo Sci. Mus.)。No. 34 (1954)–95 は n. s. (new series) として扱われ、別途巻番号 Vol. 1–17 が付されているので注意が必要。Bull. Natl. Sci. Mus. Tokyo, B. に継続。
- Bull. Natl. Sci. Mus. Tokyo, B.: Bulletin of the National Science Museum, Tokyo. Ser. B, Botany 国立科学博物館研究報告 B 植物科学 Vol. 1 (1975)–現在も継続。Vol. 29 (2003) 以降は国立科学博物館の HP, <https://www.kahaku.go.jp/research/publication/index.html>, 2020 年 1 月 25 日確認) で公開。
- Hokuriku J. Bot.: Hokuriku Journal of Botany 北陸の植物 Vol. 1 (1952)–26 (1978)。Vol. 27 (1979) から Journal of Phytogeography and Taxonomy (J. Phytogeogr. Taxon.) 植物地理・分類研究に改題。
- J. Coll. Sci. Imp. Univ. Tokyo: Journal of the College of Science, Imperial University of Tokyo 東京帝国大学紀要理科 Vol. 1 (1886)–45 (1925)。Vol. 1–8 (1895) は東京大学学術機関リポジトリ (<https://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/>, 2020 年 1 月 25 日確認) Vol. 11 (1898)–44 (1923) は Biodiversity Heritage Library (以下 BHL) (<http://www.biodiversitylibrary.org>, 2020 年 1 月 25 日確認) で公開。
- J. Fac. Sci. Imp. Univ. Tokyo, Sect. 3, Bot.: Journal of the Faculty of Science, Imperial University of Tokyo, Section III. Botany 東京帝国大学理学部紀要第三類植物学 Vol. 1 (1925)–5 (1944)。Vol. 6 (1945) から Journal of the Faculty of Science, University of Tokyo, Section III. Botany (J. Fac. Sci. Univ. Tokyo, Sect. 3, Bot.) に改題。
- J. Fac. Sci. Univ. Tokyo, Sect. 3, Bot.: Journal of the Faculty of Science, University of Tokyo, Section III.

- Botany 東京大学理学部紀要第三類植物学 Vol. 6 (1945)–15 (1995)。Vol. 5 以前は継続前誌 J. Fac. Sci. Imp. Univ. Tokyo, Sect. 3, Bot.。
- J. Jap. Bot.: Journal of Japanese Botany 植物研究雑誌 Vol. 1 (1916)–現在も継続。植物研究雑誌の HP (<http://www.jjbotany.com/>, 2020 年 1 月 25 日確認) で公開。
- J. Phytogeogr. Taxon.: Journal of Phytogeography and Taxonomy 植物地理・分類研究。Vol. 26 以前は継続前誌 Hokuriku J. Bot.。
- Mem. Coll. Sci. Kyoto Imp. Univ., Ser. B, Biol.: Memoirs of the College of Science; Kyoto Imperial University, Series B, Biology 京都帝国大学紀要理科 B 生物学 Vol. 1 (1924)–18 (1944)。Vol. 19 (1947) から Memoirs of the College of Science; Kyoto University, Series B, Biology (Mem. Coll. Sci. Kyoto Univ., Ser. B, Biol.) に改題。
- Mem. Coll. Sci. Kyoto Univ., Ser. B, Biol.: Memoirs of the College of Science; Kyoto University, Series B, Biology 京都帝国大学紀要理科 B 生物学 Vol. 19 (1947)–33 (1967)。Vol. 18 以前は継続前誌 Mem. Coll. Sci. Kyoto Imp. Univ., Ser. B, Biol.。

### ナガハシスミレの例

ナガハシスミレ (牧野 1903) (ナガバシスミレ), テングスミレ, ナガヲスミレ, ヒロハナガバシスミレ, ハイナガハシスミレ (長澤 1938), エダウチナガハシスミレ (長澤 1938), シラクキナガハシスミレ (上野 1982)

*Viola rostrata* Pursh var. *japonica* (W. Becker et H. Boissieu) Ohwi

*Viola rostrata* Pursh var. *japonica* (W. Becker et H. Boissieu) Ohwi [Fl. Jap.: 794 (Mar. 1953), comb. nud.] in Bull. Natl. Sci. Mus. Tokyo (33): 80 (July 1953), “*Viola rostrata* Muhl. var. *japonica* (W. Beck. et H. Boiss.) Ohwi”; Kitamura & Murata, Col. Ill. Herb. Pl. Jap. 2: 56 (1961); Ohwi, Fl. Jap. rev. ed.: 920 (1972); Momiyama in Satake et al., Wild Flow. Jap. Herb. Pl. 2: 251 (1982); Ohwi & Kitagawa, New Fl. Jap.: 1039 (1983); Ohwi, Fl. Jap. ed. Engl.: 639 (1984); Akiyama et al. in Iwatsuki et al., Fl. Jap. 2c: 183 (1999). ---- *Viola rostrata* Pursh subsp. *japonica* W. Becker et H. Boissieu in Bull. Herb. Boissier, ser. 2, 8: 742 (1908); Nakai in Bot. Mag. (Tokyo) 36: (90) (1922); Makino & Nemoto, Fl. Jap. rev. ed.: 767 (1931); Nemoto, Fl. Jap. suppl.: 496 (1936).

*Viola rostrata* Pursh f. *radicans* M. Nagas. in Yasô 4: 62 (1938); Hara, Enum. Sperm. Jap. 3: 215 (1954); Honda, Nom. Pl. Jap. ed. emend. (1963); Hashimoto, Index Violets Jap.: 18 (1967), sub var. *rostrata*.

*Viola rostrata* Pursh f. *ramosa* M. Nagas. in Yasô 4: 63 (1938); Hara, Enum. Sperm. Jap. 3: 215 (1954); Honda, Nom. Pl. Jap. ed. emend. (1963); Hashimoto, Index Violets Jap.: 18 (1967), “*ramos*”, sub var. *rostrata*.

*Viola rostrata* Pursh f. *alpina* E. Hama [Wild Violets Jap. Col.: 48, t. 3 (1975), nom. nud.] in J. Jap. Bot. 51: 339 (1976).

*Viola rostrata* Pursh f. *albiflora* Y. Ueno in J. Jap. Bot. 57: 318 (1982).

[*Viola inconciana* F. Maek. et T. Hashim., Violets Jap.: 9 (1963), nom. nud.]

*Viola rostrata* auct. non Pursh, Fl. Amer. Sept. 1: 174 (1814); Makino in Bot. Mag. (Tokyo) 16: 137 (1902), “*Viola rostrata* Mühl.”; Matsumura, Ind. 2(2): 387 (1912); Miyabe et Kudô in Trans. Sapporo Nat. Hist. 6: 172 (1917); Makino & Nemoto, Fl. Jap. rev. ed.: 767 (1931); Nagasawa in Yasô 4: 62 (1938); Hara in J. Fac. Sci. Univ. Tokyo sect. 3, 6(2): 85 (1952); Hara, Enum. Sperm. Jap. 3: 215 (1954); Honda, Nom. Pl. Jap. ed. emend. (1963); Hashimoto, Index Violets Jap.: 18 (1967), var. *rostrata*; Hama, Wild Violets Jap. Col.: 47, t. 2 (1975), var. *rostrata*.

今後の予定 4 「外国文献とつきあわせる。」

## 引用文献

- Hara, H. 1948–1954. *Enumeratio Spermatophytarum Japonicarum*, I–III. Iwanami Shoten, Tokyo.
- Iwatsuki, K., D. E. Boufford and H. Ohba (eds.). 1999. *Flora of Japan*, vol. IIc, Angiospermae Dicotyledoneae Archichlamydeae (c). Kodansha, Tokyo.
- Iwatsuki, K., D. E. Boufford and H. Ohba (eds.). 2001. *Flora of Japan*, vol. IIb, Angiospermae Dicotyledoneae Archichlamydeae (c). Kodansha, Tokyo.
- Iwatsuki, K., D. E. Boufford and H. Ohba (eds.). 2006. *Flora of Japan*, vol. IIa, Angiospermae Dicotyledoneae Archichlamydeae (a). Kodansha, Tokyo.
- Iwatsuki, K., D. E. Boufford and H. Ohba (eds.). 2016. *Flora of Japan*, vol. IVb, Angiospermae Monocotyledoneae (b). Kodansha, Tokyo.
- Iwatsuki, K., M. Kato and T. Yamazaki. 1995a. *Flora of Japan*, vol. I, Pteridophyta and Gymnospermae. Kodansha, Tokyo.
- Iwatsuki, K., T. Yamazaki, D. E. Boufford and H. Ohba (eds.). 1993. *Flora of Japan*, vol. IIIa, Angiospermae Dicotyledoneae Sympetalae (a). Kodansha, Tokyo.
- Iwatsuki, K., T. Yamazaki, D. E. Boufford and H. Ohba (eds.). 1995b. *Flora of Japan*, vol. IIIb, Angiospermae Dicotyledoneae Sympetalae (b). Kodansha, Tokyo.

## 学名のラテン語 (21) 種と種内分類群の学名の形容語 — 同格の形容語

京都大学総合博物館 永益 英敏

国際藻類・菌類・植物命名規約 (Turland et al. 2018, 永益・邑田 2019) は種の学名について次のように規定している。

23.1. 種の学名は属名とそれに続く 1 個の種形容語からなる二語組合せである。種形容語は 1 個の形容詞、属格の名詞、あるいは属名と同格の単語である (第 23.6 条もみよ)。もし形容語がもともと 2 個以上の単語からなるならば、それらは 1 語に連結されるかハイフンで結ばなければならない。原発表時にそのように結ばれていなかった形容語は廃棄されないが、使われるときには第 60.11 条で規定されているように 1 語に連結されるかハイフンで結ばなければならない。

単数名詞である属名を形容する「形容詞」や、『所有』を示す「属格の名詞」についてはすでに文法的にも説明してきた。しかし、「属名と同格の単語」というのがいささかわかりにくい。ここでいう同格 apposition とは文法上の用語で、名詞である属名を説明する (形容詞でも属格の名詞でもない) 形容語 (または句) のことを意味している。

もっともふつうに見られる同格の形容語は、名詞の主格がそのまま置かれる場合である。もともとラテン語ではない植物名を採用した場合に多く、たとえば和名に由来する *Prunus mume* (ウメ), *P. jamasakura* (ヤマザクラ), *Symplocos sawafutagi* (サワフタギ) のような例がある。

ラテン語の同格の名詞を用いた例もある。たとえばユリノキ *Liriodendron tulipifera*, エゾミソハギ *Lythrum salicaria* の種形容語はいずれも形容詞ではなく名詞 (女性名詞, 主格) であるため、属名の性 (どちらも中性) とは関係なくこの綴りを維持する (第 23.5 条)。これらの形容語が名

詞なのか形容詞なのかは初発表文を注意深く見なければならない。ユリノキの例では Linnaeus (1753: 535) が *Tulipifera arbor virginiana* 等を引用しているため、この形容語 *tulipifera* は名詞である。種および種内分類群の形容語の場合、以前の規約では名詞の場合、頭文字を大文字で示すことが許されていたが、現行の規約では単に、小文字で書き始められるべきであるとされている（たとえば下のセントルイス規約勧告 60F.1 [Greuter et al. 2000, 大橋・永益 2003] と深圳規約勧告 60F.1 を比較してみよ）ため、このような場合、形容語が名詞なのか形容詞なのかを判別するのが難しくなっている。

セントルイス規約 勧告 60F.1. 種および種内分類群のすべての形容語は小文字で書き始められるべきである。しかし、形容語が人名（実在であれ伝説上であれ）、地方語名（または非ラテン語の名）または以前は属名であった名前に直接由来した場合は著者が大文字で書き始めたいならばそうしてもよい。

深圳規約 勧告 60F.1. 種および種内分類群のすべての形容語は小文字で書き始められるべきである。

2 語以上の単語がハイフンで結ばれた同格の形容語には次のようなものがある。

*Adiantum capillus-veneris* ホウライシダ. 名詞+属格の名詞 (*capillus* 髪, *veneris* ウェヌス [ビーナス] *Venus* の属格)

*Hosta caput-avis* トサノギボウシ. 名詞+属格の名詞 (*caput* 頭, *avis* 鳥 [属格も同形])

*Vaccinium vitis-idaea* コケモモ. 名詞+形容詞 (*vitis* ブドウ, *idaeus, a, um* イダ山の)

上の例では名詞とそれを形容する形容詞または属格の名詞から構成されていてわかりやすいが、名詞が関わらない次のような同格の形容語もあって奥が深い。

*Impatiens noli-tangere* キツリフネ. 動詞の命令形+動詞の不定詞 (*noli* 動詞 *nolo* (欲しない) の命令形で動詞の不定詞を伴って「~するな」を意味する, *tangere* 動詞 *tango* 「触れる」の不定詞。 *Noli me tangere* (私に触れるな [新約聖書「ヨハネ伝」20 章 17 節], *me* は代名詞 *ego* [私] の対格) をそのまま用いた *noli-me-tangere* という形容語もある。

Greuter, W. et al. (eds.) 2000. International Code of Botanical Nomenclature (Saint Louis Code). Koeltz Scientific Books, Königstein.

Linnaeus, C. 1753. *Species Plantarum*. *Homiae*.

永益英敏・邑田仁 (編). 2019. 国際藻類・菌類・植物命名規約 (深圳規約) 2018, 日本語版. 北隆館, 東京.

大橋広好・永益英敏 (編). 2003. 国際植物命名規約 (セントルイス規約) 2000, 日本語版. 日本植物分類学会, つくば.

Turland, N. & J. H. Wiersma (eds.) 2018. International Code of Nomenclature for algae, fungi, and plants (Shenzhen Code). Koeltz Scientific Books, Königstein.











編集室より

会長および評議員選挙があります。投票よろしくお願いたします。また、今号は待望の「シノニムリストをつくろう」と「学名のラテン語」を掲載しております。（ニュースレター担当幹事 山本 薫）

入会申込, 住所変更, 退会届, 会費納入, 購読申込  
などは下記へご連絡ください。

〒576-0004 大阪府交野市私市 2000

大阪市立大学 理学部附属植物園

日本植物分類学会 厚井 聡 (会計幹事)

Phone: 072-891-2681, Fax: 072-891-7199

E-mail: kaikei@e-jsps.com

会 費：一般会員 7,000 円, 学生会員 3,000 円,  
団体会員 8,000 円

郵便振替口座番号：00120-9-41247

加入者名：日本植物分類学会

令和 2 (2020) 年 5 月 20 日印刷  
令和 2 (2020) 年 5 月 25 日発行

編集兼 神奈川県横須賀市深田台 95  
発行人 横須賀市自然・人文博物館  
山本 薫

発行所 茨城県つくば市天久保 4-1-1  
国立科学博物館植物研究部  
日本植物分類学会

\*ニュースレターに掲載された記事の著作権は日本植物分類学会が管理いたします。